

藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



20

MARCH 2010
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

小
椋
範
彦

受賞教員インタビュー



【第二回】
藝大ピープル 宮田亮平
【第九回】上野の杜の波瀾万丈 戦中の教官総辞職
【TOPICS】美句 音句 映句

【第一回】

上野の寄り道 散歩道

【第三回】受賞学生インタビュー

山本真衣 尾池亜美 船曳真珠

【第十二回】教員は語る

ヨコミゾマコト×野平一郎

小椋範彦

受賞教員インタビュー

蒔絵の伝統技法に新しい表現を吹き込み
日本伝統工芸展東京都知事賞を受賞。



Photo by Yuri Gomi

受賞作品について

私の蒔絵は壁面でも立体でも、古典的な技法を踏まえながら、草花や風景などの自然を表現するものがほとんどで、材料や明暗の対比をつけた表現で構成しています。今回、賞をいただいた「割貝蒔絵桜花文飾箱」は、用途にはこだわらず飾り箱として制作した作品で、割貝技法と引掻き技法（蒔絵

をした後に針などを使って引掻いて絵を描く技法）で桜の花を構成し、筆のタッチを活かし、色漆を使って滲み、暈しのような絵画表現をした蒔絵なのです。

この表現に至ったきっかけは、三年前に個展の準備のために行ったイタリアへの取材旅行です。祭壇画、風景を中心に初期ルネサンスの画家ピエロ・デラ・フランチェスカの作品を観て回りながらローマ、

フィレンツェ、アレッツォ、サンセポルクロ、アッシジを訪れました。

アッシジの南にトレーヴィイという町があるのですが、その風景に触発されて蒔絵パネルを制作しましたが、一瞬の印象を大切に金、銀粉を蒔き詰めたところにトレーヴィイの風景を引掻き、色漆で滲み、暈しを使って描いているときに直に感情が伝わっていくのを感じ、夢中で描きました。

この数年、私は図案を転写してそのとおりに蒔絵にする方法に物足りなさを感じて、何か「味」のようなものを模索していましたので、自分の気持ちこそ素直に伝えることのできる引掻きを活かした表現はとても新鮮に感じました。今回、この時の感覚を活かし、今までの作品と合わせることで新しい空間表現ができたと思います。

実は藝大修了作品に同様の表現を使っていたのですが、約二十五年経った今の作品との比較も面白いですね。

モチーフになる植物は、いろいろな花の資料を形の記憶としてス

第20号 目次

- 02 受賞教員インタビュー
小椋範彦
- 04 TOPICS
美旬 藝大デザインプロジェクト
音旬 藝大21「アジア・躍動する音たち'09」
映旬 アニメーション専攻
公開講座「馬車道エッジズ」
- 08 第1回 藝大ビープル
宮田亮平 学長
- 10 展覧会&演奏会
シャガール・ロシア・アヴァンギャルドとの出会い
／コレクション展
- 12 上野の寄り道 散歩道 第1回
上野公園の銅像
- 14 上野の杜の波瀾万丈 第9回
戦中の教官総辞職 吉田千鶴子
- 16 第3回 受賞学生インタビュー
山本真衣 尾池亜美 船曳真珠
- 19 教員は語る 第12回 藝大への期待・抱負・提言
ヨコミヅマコト×野平一郎
- 22 NEWS2009.8～2010.1
編集後記



わりがいまきえおうかもんかざりぼこ
『割貝蒔絵桜花文飾箱』

ケッチャや写真などで記録してあります。これまでの作品では梅、桜などの花すべてが咲いている状態で文様として構成していましたが、今回の作品では、桜の花が自然に咲いている風景の一部分を構成して制作しました。

漆の魅力について

何とも言えない神秘的な黒の艶ですね。それと併せて蒔絵での金属の研ぎ出し面はとても美しいです。まず見た瞬間に「ああ、きれい」と感じてもらえるのが最も嬉しいです。漆は日本を代表する素材であり、同時に蒔絵は日本を代表する表現の一つです。さまざまな漆の質感、素材の色、輝きに興味を持ちます。漆芸の魅力を感じていただければ良いですね。



藝大通信
No.20
TOKYO GEIDAI
東京藝術大学広報誌
藝大通信 第20号

■編集発行

東京藝術大学 藝大通信編集部

■編集委員

長濱雅彦(美術学部デザイン科准教授・編集長)

斎藤典彦(美術学部絵画科日本画准教授)

檜山哲彦(音楽学部音楽文芸教授)

毛利嘉孝(音楽学部音楽環境創造科准教授)

大石泰(演奏芸術センター准教授)

■アートディレクター

松下 計(美術学部デザイン科准教授)

■表紙デザイン

松下 計

■表紙撮影

五味由梨

■制作

株式会社 平凡社

■発行日

平成22年3月10日

■お問い合わせ先

東京藝術大学 総務課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 050-5525-2026

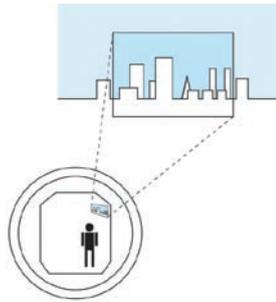
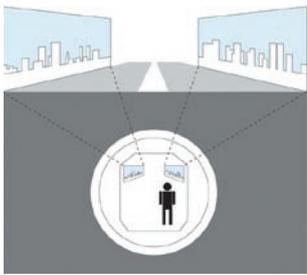
FAX 050-5525-2479

e-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp

URL <http://www.geidai.ac.jp/>

小椋範彦(おぐら・のりひこ)准教授—工芸科(漆芸)
一九五八年岡山県生まれ。一九八五年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻修了。一九八五、九八年重要無形文化財保持者田口善国のもとで制作助手を務める。二〇〇二〜〇九年東京藝術大学美術学部工芸科(漆芸)非常勤講師。二〇〇九年より現職。同年「割貝蒔絵桜花文飾箱」で第五十六回日本伝統工芸展東京都知事賞を受賞。

都営交通をテーマにした藝大生によるデザイン提案 「藝大デザインプロジェクト」



イマドコ (特許出願中)

地下鉄の窓には暗い長いトンネルが映るだけで、乗客はどのあたりを走っているか確認できないということから発想したナビゲーションシステム。

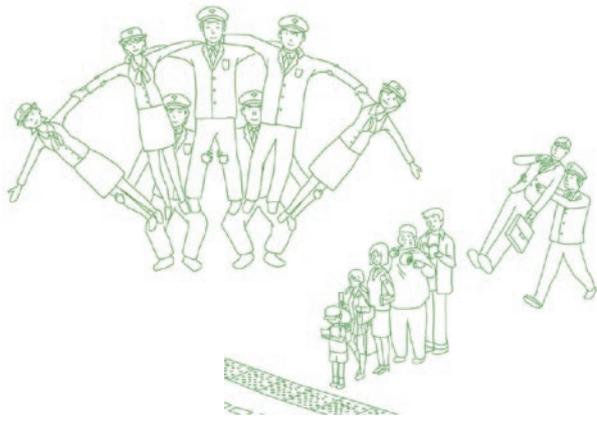
地下鉄の車両内に備えつけたディスプレイに、リアルタイムで地上の様子を表示することで、走っている列車の現在位置を確認できるようにする。ディスプレイに表示されるのは、事前に作成した3Dの建物などで、これらの3D映像の中に、ラッピングバスやアドバルーンなどの広告媒体を作り込むことにより、広告展開も可能となる。



ちかてつどうぶつえん

都営大江戸線の上野御徒町駅から新しくつくられた地下通路を利用すると、東京都交通局が運行する日本初のモノレール「上野動物園モノレール」がある上野動物園までは意外と近いことがわかった。そこから「都営線を使って動物園に行こう!」という、キャンペーンを企画立案。

参加者は立体レンズ付きの動物のお面 (= 地下鉄、モノレールの乗車券 + 動物園の入場券) をかぶり、大江戸線各駅のホームや、上野御徒町から伸びる地下通路で、立体的な飛び出す動物の絵を探しながら動物園に向かう。



イチョウさん

親切で思いやりのある「イチョウさん」という地下鉄駅員のキャラクターを作り、新人駅員が都営交通全体のイメージアップにつながるような接客を身につけるためのマニュアルを作成。イチョウさんの活躍する姿を描いたユーモアあふれる「接客マニュアル」とともに、日々の接客での出来事を記録し、年数を重ねるごとに、銀杏の葉が色づいていくようなデザインのダイヤリーや、実際の銀杏の枝で気持ちをこめて作ったペンをセットにした「イチョウさんセット」を作成した。

my つりかわ展

日本の電車のつり革は同じ形ばかりで個性がないが、世界中の電車にはさまざまな形をしたつり革も数多く存在していることがわかった。そこで、自分専用のつり革があってもいいのではと、藝大生を対象につり革のアイデアを募集。

応募作品 89 点全てを展示し、その中で優れた作品を実際の形にして展示した。



TODAN

(特許出願中)

地下鉄利用者に階段利用者が少ないことから、「駅から地上への移動空間」を少しでも楽しいものにできないかという発想から考案。

改札で使用するパスモ等の IC カードを、地下鉄駅の階段に設置したパネルにタッチすることで、利用者が何メートル階段を登ったかという情報が累積され、その情報を登山に置き換えることで、バーチャル登山を体験することができる。



東

京藝術大学デザイン科では二〇〇六年度より、大学院修士課程一年生、約三十人の授業として、専門領域を横断したチーム編成による「デザインプロジェクト」を立ち上げてきた。

これまでの三年間は、「足立区」との連携・協力により、グラフィック、プロダクト、空間、環境、映像、描画といった研究領域の垣根を越えて、複合的なデザインを開発・発表してきたが、四年目となる二〇一〇年度は、「東京都交通局」をテーマにプロジェクトに取り組みることとなった。

東京都交通局と云えば「都営地下鉄」のイメージが強いが、ほかにも都電、バス、新交通、モノレールという多彩なインフラがある。それらと、さまざまなデザインフィールドを組み合わせて具体的な提案を行うという、実践的なプロジェクトだ。

五つのチームが、都営交通の現場を体験し、調査を積み重ねてプロジェクトを構築し、その成果は二〇〇九（平成二十一）年十月十八日から同二十日まで新宿西口広場イベントコーナーで発表された。初日には出展作品のプレゼンテーションも実施された。

学生の指導にあたったデザイン科（空間・設計）の橋本和幸准教授は、「デザイン科で学ぶ学生は、藝大の中でも特に社会性やリアリティが求められます。調査から提案まで半年弱しかないにもかかわらず、各チームのリーダーが中心となって、藝大生ならではの、ユニークでオリジナリティ溢れるものが揃いました」と言う。

「イマドコ」は、地下鉄車内の地上ビジュアルナビゲーション。「ちかてつどうぶつえん」は、都営大江戸線を利用して上野動物園へ行く！ というキャンペーン。「イチョウさん」は、思いやりのある地下鉄駅員のキャラクター「イチョウさん」を使った接客マニュアル。「my つりかわ展」は、自由な発想のつり革アイデア展。「TODAN」は、都営大江戸線の階段で IC カードを使用した仮想登山。どれも藝大生らしい創意と工夫に富んだ提案ばかりである。

身近で不可欠な公共交通をどのようにデザインし、実際に活用できるものにするか。「イマドコ」と「TODAN」は特許を出願中というように、「藝大デザインプロジェクト」は、社会と連動する藝大を、学生自らがアピールする絶好の機会となっている。

神秘の国・ミャンマーの伝統音楽を紹介 藝大21「アジア・躍動する音たち'09」



		1	
5	3		2
	4		

1. 龍のモチーフをあしらった黄金色に光り輝く「サインワイン」の演奏風景
2. 演奏に合わせて舞台上で踊るマリオネット(操り人形)
3. 4. 5. ミャンマーの伝統楽器の数々



演

奏楽センターでは、「藝大の響き」、「奏楽堂シリーズ」、「藝大21」を三本の柱としてそれぞれメッセージを込めた企画演奏会を展開してきているが、広いパースペクティブで「今」という時代を見つめる「藝大21」企画として、さまざまなアジアの音楽を紹介する「アジア・躍動する音たち'09」を二〇〇九(平成二十二年)十一月一日に奏楽堂で開催した。

今回の演奏は、ミャンマー伝統音楽合奏団を招き、神秘の国・ミャンマーの伝統音楽を紹介したもので、「サインワイン」という形態による演奏は、主に王宮における各種儀礼や王が登場する場面で演奏し、民間では芝居とともに演奏されてきた。奏楽堂のステージ上には、サインワイン(龍のモチーフをあしらった黄金色に光り輝くいくつかの楽器)が設置され、そこに七人の奏者らがミャンマー独特の民族衣装に身を包んで演奏を繰り広げた。披露されたのは、歌謡を中心とした二拍子の七曲。まばゆい伝統楽器やマリオネット(操り人形)を駆使した神秘的なリズムに会場に集まった観客は魅了された。

また、本公演には視覚障害者一五〇名(補助者を含む)をご招待し、演奏を楽しんでいただくという、本学にとっても初の試みがなされた。

この試みについて、主催した演奏芸術センターの松下功教授は、「まだ誘導などごちんさがあるが、今後も研究を重ね、いつでも演奏会場へ足をお運びいただけるよう経験を重ねていきたい」と、こうした試みを今後も続けていくと語った。

アジアの音楽を紹介する「アジア・躍動する音たち」。次回は二〇一〇(平成二十二年)五月七日にブータンの音楽を紹介する予定となっている。

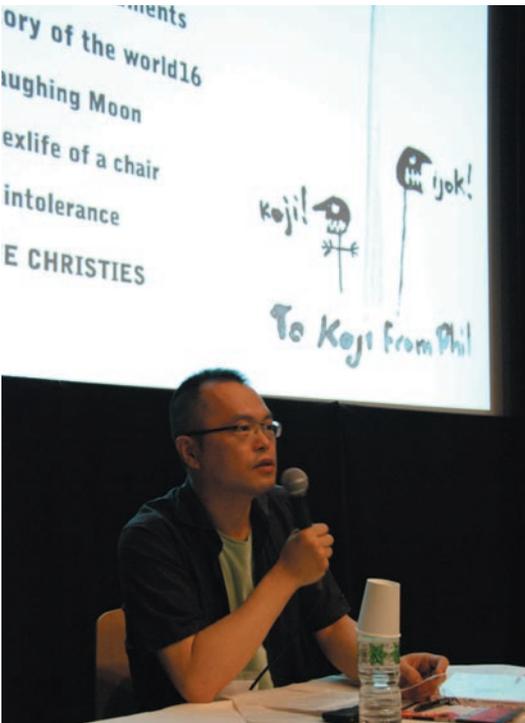
アニメーション専攻の新たな試み

公開講座「馬車道エッジズ」



- 1.2 『現代映像プロデュース論』 講座風景
3. 『現代映像プロデュース論』 ロゴマーク
- 4.5 『コンテンポラリーアニメーション入門』 講座風景
6. 『コンテンポラリーアニメーション入門』 チラシ

1	
	2
4	5



二〇〇八（平成二十）年四月に設置され、二年目を迎える大学院映像研究科アニメーション専攻では、新たな試みとして公開講座「馬車道エッジズ」『現代映像プロデュース論』、『コンテンポラリーアニメーション入門』を全八回にわたり開催した。

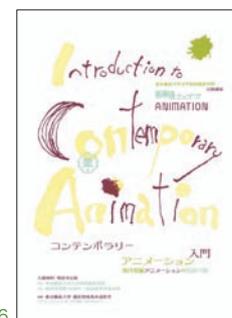
自らもプロデューサーとして第一線に身を置いている岡本美津子教授が企画・実施した『現代映像プロデュース論』では、世界を股にかけて活躍している旬のクリエイティブリーダーやエグゼクティブプロデューサーらを招き、昨今役割が大変重要となっているプロデューサーについて、自らの経験に基づく世

界進出の成功談や苦勞談、日本アニメーションの制作現場や流通の構造などの具体事例をもとに「最もホットな人の、最もホットなビジョン」として語っていただいた。

また、『コンテンポラリーアニメーション入門』では、『カフカ 田舎医者』などで世界の各賞を受賞した山村浩二教授が、短編アニメーションの基礎知識に関してや、世界的に「いま」を象徴するアニメーション作家が、どのような意識で作品制作を行っているかなどについて解説した。本講座は、アニメーション映像の可能性の最先端を走る短編アニメーションの鑑賞を中心に実施され、ふだん目にするこ



3



6

とができない世界の作品が紹介された。「ジャパニメーション」の名で世界中からリスベクトされ、現代日本を代表する映像文化として認知されてきた日本のアニメーション。その発展を促すための企画を今後もさまざまな形で継続していく。



みやた・りょうへい

1945年 新潟県佐渡に生まれる。
1972年 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻（鍛金）修了。
1990年 文部省在外研究員（ドイツ・ハンブルグ工芸美術博物館）。
1997年 東京藝術大学教授、2001年同美術学部長、2004年同理事・副学長。
2005年 東京藝術大学学長。
学長、金工作家としての活動とともに日展評議員・審査員、現代工芸美術家協会理事・審査員、文化庁「文化審議会」委員（会長代理）、国立大学協会理事、日本放送協会「中央放送番組審議会」委員（副委員長）、東京都「東京芸術文化評議会」評議員などを務める。



宮田亮平 学長

「藝大ピープル」では毎回、東京藝術大学で最も注目すべき話題の人物を紹介していきます。
第一回は、《シユプリンゲン「悠」》で第四十一回日展内閣総理大臣賞を受賞するとともに、
二〇一〇（平成二十二）年四月から六年間の学長再任が決まった宮田亮平学長です。

まず学長再任について、二〇〇五（平成十七）年十二月の就任以来の四年間を振り返っていただけますでしょうか。

もう四年も経ったんですね。本当にあっという間です。僕が学長になって一番力を注いだのは、藝大がいかに社会に貢献し、社会と共存できるかということを探し、実践するための糸口を見つけることです。それと同時に、検証してきたものを教員・学生のモチベーションが上がるように位置づけ、藝大がさらにすばらしい場所となるように創意工夫することですね。

この間における一番大きな出来事は、何と云っても「創立一二〇周年記念事業」です。就任して二年目に迎えましたから、正直大変でした。しかし、たった一日の記念式典で終わらせるのではなく、七つの柱、六十以上の事業から成る記念事業を一年にわたってやり遂げたわけですから、藝大にはそれだけの蓄積があるということなんです。しかもそれが一過性のお祭りで終わらず、きちんと検証されて記念事業の記録・報告の冊子やDVDとしてアーカイブ化されているんです。これもすばらしいことだと思っております。

二〇〇四（平成十六）年に東京藝大は国立大学法人になりました。これに伴う変化も大きかったのではないのでしょうか。

法人化後は、評価に対して非常に敏感になりました。受ける評価によって大学運営が大きく変わってくるわけですからね。そうしたときに藝大の難しいところは、同様の形態を持った比較できる大学がないことです。ですから、唯一の国立総合芸術大学として、高い次元でモチベーションを保つのは大変なことなんです。

藝大は教育も研究も、常に高いレベルで活動しているのにそれを伝える方法をあまり持っていない。藝大を発信していくというのは、言わば「行商人」の仕事なんです。国や地域や企業に藝大をアピールして、リヤカーに宝物を積んで帰ってくるのが僕の仕事。そこに道を付けることができたのは自慢できるところだと思っています。

また、社会との繋がりを重視する面でも大きく変わりました。社会連携センターを設置したことで、受託研究などは法人化前と比べると約三十倍になり、今もそれを維持していますし、キャンパスに多くの人が自由に入ってきてくれるようになり、新しい藝大像ができたのではないのでしょうか。藝大に親しみを持てるようになったとか、芸術が遠い世界ではなくなったといった声を聞くと、本当にありがたいと感じるんですよ。

四年前に平山郁夫先生から学長を引き継いだときには、「自分にはとても無理だな」という感じがありましたよ。平山先生のまさに巨星のような存在感に比べて、自分は一介の金工作家ですから。それでも何とかここまでたどり着けたのは、教員や事務の人たちの協力があればこそと思っております。

「日展内閣総理大臣賞」受賞の喜びとともに、在校生ならびに新入生へのメッセージをお聞かせください。

今回受賞した《シュプリングエン「悠」》の「悠」というのは、二〇〇八年度の卒業式に揮毫した字なんです。「悠々」「悠然」「悠久」「悠遠」など、「悠」にはさまざまの言葉があります。その人なりの

「悠」を思い描いて欲しいと願い贈りました。その「悠」のイメージで作品を創ったら、トップ賞をもらってしまった。学生たちを送る言葉、迎える言葉をイメージした作品が受賞したというのは、まさに作家としての活動とともに、学長としてのメッセージが認められたということですね。

それほど大きくない作品ですが、イルカが三十数頭います。自然の中をイルカが「悠々」と泳いでいる姿をイメージしたこの作品では、芸術家の立場から環境問題への提言を意識しております。でも、本当は楽しく創っただけなんですけどね（笑）

芸術家を志す若者に伝えたいのは、いかに自分を大切にするかということです。自分を愛する「もう一人の自分」を常に持っていてもらいたい。自分をどれだけ愛せるか、そしてそれを客観的に見られる自分がいるということ。そういう人間になって初めて、他人にも愛を伝えることができるのではないのでしょうか。

芸術に向かつて燃え尽きる自分と、自然体で悠然と構える自分。二つの関係を持つてあらゆることに向き合ってもらいたいですね。



第41回日展（平成21年度）内閣総理大臣賞受賞作品《シュプリングエン「悠」》©丸子成明

EXHIBITION & CONCERT

Information

展覧会 & 演奏会



上：朝倉文夫《よく獲たり》
昭和21年(1946) ブロンズ 高52.5cm
朝倉彫塑館蔵

下：橋本平八《猫》
大正13年(1924) ブロンズ 高33.2cm
東京藝術大学蔵

4/6~
6/6

コレクション展

Part1 朝倉文夫 —朝倉彫塑館所蔵—

Part2 芸大コレクション —動物を中心に—

台東区と東京藝術大学は大学美術館において、4月6日から6月6日まで、“コレクション展”を開催いたします。

日本が西洋化を推し進める明治時代—西洋彫刻の基礎のなかった時代に、日本の近代彫塑は朝倉文夫(1883~1964)の才能と技術によって飛躍的な進歩を遂げました。朝倉作品の魅力を一と言でいえば、自然から学んだ自由な写実表現ということになります。

〈Part1 朝倉文夫〉は、修業時代から最晩年までの朝倉の仕事の全貌を通観でき

る構成とし、その魅力をわかりやすく解説します。ここでは、保存修復工事のため長期休館中の朝倉彫塑館が所蔵する朝倉文夫作品の一部を展示しますが、これほどの数の朝倉作品をまとめて見られる機会は、これまでほとんどありませんでした。この“コレクション展”の会場において、ぜひ朝倉の自由な写実の世界をご堪能ください。

朝倉も学び、のちに教鞭をとった東京美術学校、現東京藝術大学の〈Part2 芸大コレクション〉では、主に動物をモチーフに

した名品を一堂に展示します。美術資料として蒐集した古代の動物作品から、隣接する上野動物園でスケッチをしていた学生の卒業制作まで、幅広く紹介します。

この展覧会は、それぞれのコレクションをまとめた2部構成になっていますが、両方をご覧いただくことにより、芸術家の出発点ともいえる—自然から学ぶ取り組み—をいろいろな角度から感じることができるといえるでしょう。この“コレクション展”で自然から学ぶ芸術家の眼や姿勢をお楽しみいただけたら幸いです。

展覧会スケジュール (2010年1月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

大学美術館本館

コレクション展

Part 1 朝倉文夫 —朝倉彫塑館所蔵—

Part 2 芸大コレクション —動物を中心に—

4月6日(火)~6月6日(日)

入場料 一般500円、高・大学生300円(中学生以下は無料)

ポンピドー・センター所蔵作品展

シャガール—ロシア・アヴァンギャルドとの出会い

~交錯する夢と前衛~

7月3日(土)~10月11日(月・祝)

入場料 一般1,500円、高・大学生1,000円(中学生以下は無料)

※ 開館時間は、10:00~17:00(入館時間は16:30まで)。

月曜日及び8月21日(土)休館。

ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。

なお、展覧会によっては、開館時間及び休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車での来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先

● ハローダイヤル TEL: 03-5777-8600

● 大学美術館 TEL: 050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

ポンピドー・センター所蔵作品展

シャガール — ロシア・アヴァンギャルドとの出会い

～交錯する夢と前衛～

7/3～
10/11

鮮やかな色彩と幻想的な作風で親しみあるシャガール。20世紀初頭に始まるロシア・アヴァンギャルド運動と密接な関係があったことをご存じでしょうか？

フランスで活躍したイメージの強い作家ですが、実は旧ロシア帝国ヴィテブスクで生まれ、ロシアの前衛芸術とは強いつながりを持っていました。

本展は、充実したコレクションを誇るポンピドー・センターからシャガールの

作品約70点を選び、その人生を追うとともに、同時代に活躍したロシア前衛芸術の巨匠たちの作品約40点と対比して紹介するものです。《ロシアとロバとその他のものに》をはじめとする初期から晩年までのシャガールの代表作を展示するほか、日本ではまだあまり知られていないロシア前衛芸術の旗手ゴンチャロフ、ラリオノフの重要作品を日本で初めて公開します。ロシアの作家の作品と並んで展示されることを望んでいたシャガールの夢を実現させた意欲的な展覧会となっています。



左：マルク・シャガール《ロシアとロバとその他のものに》1911年
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010, CHAGALL®
©Collection Centre Pompidou, Dist. RMN / Jean-François Tomasian

右：マルク・シャガール《日曜日》1952-1954年
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010, CHAGALL®
©Collection Centre Pompidou, Dist. RMN / Philippe Migeat

演奏会スケジュール (2010年2月16日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

奏楽堂

藝大フィル「新卒業生紹介演奏会」

4月15日(木) 18:30開演 有料 自由席
ダグラス・ポストック/藝大フィル

同声会新人演奏会

4月17日(土) 13:00、18:00開演(2公演)
有料 自由席

創造の社「ヤニス・クセナキス—音の建築家」

4月22日(木) 19:00開演 有料 自由席
ジョルト・ナジ/藝大フィル

アジア・躍動する音たち「ブータン仏教音楽の世界」

5月7日(金) 19:00開演 有料 自由席

室内楽コンサート I

5月12日(水) 18:00開演 有料 自由席
ライブツィヒ・カルテット 旧奏楽堂

室内楽コンサート II

5月15日(土) 15:00開演 有料 自由席
ライブツィヒ・カルテット

学生オーケストラ定期演奏会

5月28日(金) 19:00開演 有料 自由席

東京藝大チェンバーオーケストラ定期

6月4日(金) 19:00開演 有料 自由席
ヨハネス・マイルス

上野の森オルガンシリーズ 15

6月5日(土) 15:00開演 有料 自由席

藝大フィル定期演奏会

6月18日(金) 19:00開演 有料 自由席
ペーター・チャバ/藝大フィル

学長と語ろう VII

6月19日(土) 15:00開演 無料(事前申込制)
指定席

ゲスト：鶴田真由(女優)
湯浅卓雄/学生オケ(予定)

学生オーケストラ演奏会

「プロムナード・コンサート I」

6月25日(金) 19:00開演 無料 自由席

うたシリーズ XI-I 日本歌曲

6月26日(土) 15:00開演 有料 自由席

藝大吹奏楽

6月30日(水) 18:30開演 無料 自由席

管打楽器シリーズ「海外との交流」

I ヴェンツェル・フックス

クラリネットの魅力

7月9日(金) 19:00開演 有料 自由席

II パリ国立高等音楽舞踊院の精鋭たち

7月13日(火) 19:00開演 有料 自由席

和楽の美

9月9日(木) 18:30開演 有料 指定席

モーニングコンサート

5月13日、20日、27日、6月3日、10日、
24日、7月1日、8日、15日、11月11日、
25日、2011年2月10日、17日
(いずれも木曜日 11:00開演) 無料(要整理券)
自由席

※ 特に断りのないコンサートの会場は、すべて本学構内の奏楽堂です。詳細につきましては、3月末発行の「平成22年度コンサート・スケジュール(前期版)」をご覧ください。

※ 2010年2月16日現在の予定表です。今後、演奏会内容、日程等については、変更することがございます。

※ 演奏会の曲目、開演時間等の詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。
<http://www.geidai.ac.jp/>

※ 本学には駐車場はございませんので、お車のご来館はご遠慮ください。

※ チケットの取り扱い

- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999
(一部携帯電話と全社PHSはご利用いただくことができません。)
- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650

※ 上記演奏会のほか「学内演奏会」の日程については、下記までお問い合わせください。

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300
- 音楽学部附属音楽高等学校 TEL: 050-5525-2406
- 旧東京音楽学校奏楽堂 TEL: 03-3824-1988

上野の 寄り道 散歩道

第1回

上野公園の銅像



1 ボードワン博士像 (1820～1885)
建立：1973年 再建：2006年 原型制作：林昭三



2 野口英世像 (1876～1928)
建立：1951年 制作：吉田三郎

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。
藝大のすぐ近くにも、由緒正しい社寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。

上野公園の正式名称は「上野恩賜公園」と言い、江戸時代までは寛永寺の境内地で、一八七三(明治六)年に、芝、浅草、深川、飛鳥山とともに、日本で初めて公園に指定された。

上野公園の銅像と言えば、だれもが真っ先に思い浮かべるのが「西郷隆盛像」だろう。西郷隆盛は勝海舟との会談により、江戸城の無血開城を実現した明治維新の指導者である。一八九八(明治三十一)年に除幕式が行われた銅像の作者は、東京美術学校(東京藝術大学美術学部の前身)の彫刻科教授でもあった高村光雲。ちなみに、連れている犬(こちらは後藤貞行)の名前は「ツン」と呼ぶそうだ。

公園の中央、東京国立博物館前の庭は「竹の台」と呼ばれ、もとは寛永寺の根本中堂があった場所。その手前には「小松宮彰仁親王像」が立っている。騎馬姿の親王は戊辰戦争や佐賀の乱、西南の役に功績があり、日本赤十字社



4 安井誠一郎像 (1891～1962)
建立：1966年

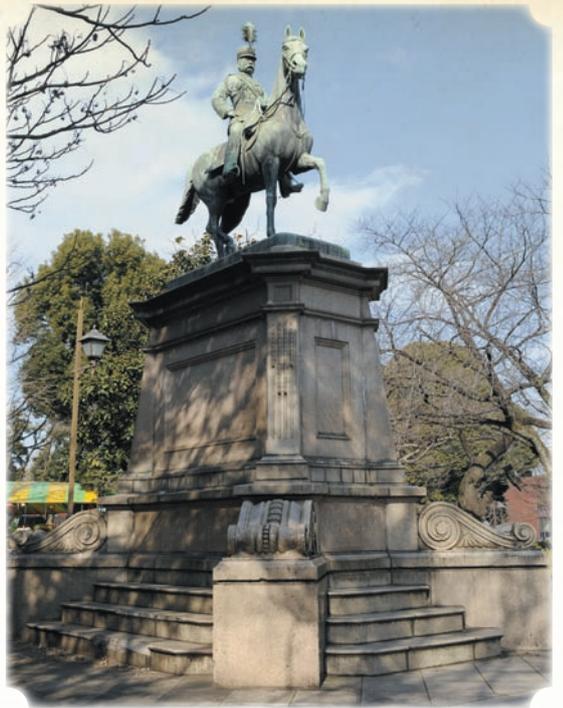


5 上野大仏
建立：1631年 再建：1843年



6 西郷隆盛像 (1828～1877)
施工：1897年 除幕：1898年12月
制作：高村光雲 (人物)、後藤貞行 (犬)

像に変更されたという逸話がある。ほかに東京文化会館の横には、一九四七(昭和二十二年)年の公選で初代都知事になり、その後三選し十二年在任した「安井誠一郎像」などもあるが、ユニークなのは上野精養軒に隣接する丘の上にある「上野大仏」であろう。一六三二(寛永八)年に、越後村上藩主堀直寄によって寄進されたが、たびたび地震や火災に遭い、現在は顔の部分だけが祀られている。



3 小松宮彰仁親王像 (1846～1903)
建立：1912年 制作：大熊氏廣



の総裁も務めた人物である。竹の台の東の木立の中に立つのは、世界的な細菌学者として知られる「野口英世像」。試験管をかざした実験中の姿を表したもので、台石にはラテン語で「PRO BONO HUMANI GENERIS (人類の幸福のために)」と刻まれている。「野口英世像」と噴水を挟んで反対側には、「ボードワン博士像」を見つけていることができる。アントニウス・フランシスカス・ボードワン(ボードウィン)は幕末に来日したオランダ人医師で、明治政府が大学附属病院としての利用を決めていた上野の山を、恵まれた自然を守るため公園にするよう政府に提言した人物である。なお、一九七三(昭和四十八)年から置かれていた博士の像は、制作時の手違いにより実弟(元駐日オランダ領事)の写真をもとにした像であった。そのため胸像取り替えの活動が起り、二〇〇六(平成十八)年十月に本人の像に変更されたという逸話がある。

波瀾万丈

第九回

戦中の教官総辞職

吉田千鶴子

太平洋戦争末期、文部省が行った美校改革。「闘ふ学校」に切り替えることを理由に断行された非常時の下の指導陣一新。

突然の改革断行

今、文部科学省ないし政府が東京藝術大学は時代にそぐわないから教員を全部入れ替えて改革するなどということはあり得ないが、昭和十九（一九四四）年五月には東京美術学校（美校）に対して実際にそれが行われたのである。

時は太平洋戦争も末期、学徒動員で校内は人影も疎ら。人はみな自由を奪われ、空襲に怯えつつ窮乏生活に耐えていた時期である。五月二十日、突然校長の澤田源一に代わって文部省専門教育局長の永井浩が校長事務取扱となり、同月二十四日、永井は教官を招集して就任の挨拶をするや、文部省は美校を改革するから一応全員辞表を出して貰いたいと宣言し、全員を個別に呼んで永井と部下の佐藤得二の前で白紙に署名捺印しただけの辞表を提出させた。いかに非常時下であったとはいえ、大多数の教官は内心穏やかでなかっただろうが、誰も敢えて反論せず、命令にしたがったので、文部省は思

い通りの改革を断行することができた。戦時体制が敷かれる前は、このようなことがあれば新聞や雑誌の好材料となり、たとえば明治三十一年の美校騒動や大正五年の美校改革運動のときのように華々しい報道合戦が繰り広げられるのであったが、この当時のジャーナリズムは完全に軍国政府の統制下にあったから、もっぱら文部省の英断であるという報道がなされ、美術界も全く鳴りを潜めていた。『朝日新聞』（五月二十五日）などは、美校改革は積年の懸案であり、目下戦時体制強化のもとで生徒たちも闘う学徒の一翼を担っているにも拘らず、教師陣の姿勢はそれに反する傾向があったので、文部省は「同校内容を改革し闘ふ学校への完全な姿に切り替えることを決意」して改革断行に踏み切ったのであると報じている。

改革の結果、上野直昭が校長に就任し、官展系作家が占めていた日本画・油画・彫刻科その他の教授、助教授のポストは在野系の有力作家に明け渡された。これは美術界の重大事件であった、戦後、石井柏亭はこの事件を次のように論

評した。

美校の改革は一般に難事と見なされていた。それが何の予想もゆるさないうで一刀両断的に

決行され、永く根を張っていた実技方面の教授の大部分を退陣させ、新たに校長として大阪市美術館長（前京城帝国大学教授）の上野直昭を迎え、教授として、日本画には安田靉彦、小林古径、洋画には安井曾太郎、梅原龍三郎、彫刻に石井鶴三、凶案に富本憲吉を任じ、奥村土牛、碓伊之助等をして教授を助けさせることにした。このうち石井、富本以外は美校出身ではなく、しかも新任教授のいずれもが在野団体の首脳部として新潮流を導いてきた作家であった。軍部に圧迫されていた当時の文部省としては珍らしく民主的（？）な英断であった。或は軍部の威力の余勢を借りて断行したのかもしれない。この辺は分らないが、この改革をもって日本における自由主義の抬頭の一徴候だとアメリカでは放送したそうである。もし戦時の政治にただ一つの

善政があったとすれば、この美校改革こそそれであろう。（『美術八十年史』昭和二十九年、美術出版社）

しかしながら、どこが「自由主義」の台頭であり、何が「善政」か。改革の経緯を辿ってみれば、それが事実には反することは明白である。

改革の経緯

文部省における美術行政の柱は美術教育と官設展覧会であり、美術教育の中心をなすのが東京美術学校（美校）。官設展覧会は明治四十年創設の文部省美術展覧会（文展）に始まり、大正八年創設の帝国美術院展（帝展）、昭和十二年創設の文部省美術展覧会（新文展）へと続く。文展は美術審査委員会、帝展は帝国美術院、新文展は文部省（帝国芸術院を別設）のもとに置かれた。美校は文展の開設時からそれと密接な関係を有し、教官の多くが美術審査委員を務めた。帝国美術院は在野団体の実力者も加え



昭和16（1941）年5月、下志津野外演習中の図案部1年生

て組織されたのだが、それでも帝国美術院会員の四六パーセントは美校の教官が占めた。校長の正木直彦にしてからが、官展創設に尽力して創設以来主事を務め、帝国美術院幹事、次いで院長を兼ねていたのである。美校と官展のあり方については種々の批判はあったものの、それでも正木が双方に君臨している間は安定が保たれていたのであるが、昭和七年正木が公職を退くと、情勢に変化が生じた。

昭和十二年、帝国芸術院が設置されたときは、その美術部門の会員中に占める美校教官の数は約二四パーセントで、アカデミーの権威の凋落は明白となった。特に日本画科は川合玉堂が昭和十三年に辞職した後、会員は結城素明一人となり、油画科も大御所の岡田三郎助が十四年に死去、藤島武二も同十八年に死去し、また南薫造も同年辞職すると、会員は小林万吾のみとなり、指導陣の弱体化を指摘する声が学外のみならず学内でも高まった。

替えが行われ、工芸科、建築科、師範科にも余波が及んだ。在野系の有力者が選任されたとはいえ、新陣容を一見してわかるのは日本画科と彫刻科が特に院展系作家で占められたことだ。それは当時の日本画の有力作家が院展系に多かったことにもよるが、最も大きな原因は横山大観の宿願にあった。大観は美校第一期生として岡倉天心の薫陶を受け、日本画革新の道を追求して大成し、再興日本美術院を率いるとともに折にふれて母校に天心の精神を蘇らせる画策をした。彼は日中戦争が始まるや、率先して「彩管報国」に身を捧げ、画の代金を陸・海軍に献納し、岡倉天心偉績顕彰会を設立するなどし、昭和十八年五月、「大東亜戦争」に際して全美術団体合同の日本美術報国会が結成されるや会長となり、美術界のトップの位置についた。これより先、昭和七年に和田英作が美校の校長に就任した頃から、母校批判と改革論を表明しはじめた彼は、ここに至って文部省美術行政の最高顧問であり、また、院展の庇護者でもあった細川護立と意を通じて美校の人事を左右するに至ったのである。



昭和30（1955）年5月18日、日本美術院における横山大観米寿祝賀会にて。右より細川護立、上野直昭、横山大観

文部省は昭和十年の帝展松田改組の失敗を反省し、帝国芸術院設置のときから美術界の長老たち（清水澄、松浦鎮次郎、正木直彦、岡部長景、細川護立）を顧問として美術行政を進めることとし、同十五年には正式な文部大臣諮問機関としての美術振興調査会を設置した。これは侯爵細川護立を会長とし、文部官僚、帝室博物館長、美校校長、帝国大学教授、衆議院議員、美術研究所長等から成る組織で、当然加わるはずだった正木直彦が同年死去したため、後任校長の芝田徹心、次いで澤田源一が委員となった。この会は「東亜新秩序建設の時代的要求に即応するための美術上の方策三項目」を答申したが、そのなかに「美術教育の刷新」という項目があり、そこで美校は文部省が改革の手を加えるべきターゲットとなったのである。改革の狙いは旧官展時代の遺制と癒着した美校の指導陣を廃止し、挙国一致の新体制を具現する帝国芸術院・新文展の組織に見合った指導陣を作ることにあつた。

改革の結果

改革の結果、柏亭が指摘している以上に広範囲にわたって教官の入れ

この改革は有力作家を多数美校教官とし、教育現場に活気をもたらすはずのものであった。しかし、すでに戦争は教育現場そのものを破壊し去り、新指導陣の効力が十分発揮されるような状態ではなく、作家たちに無益な努力を強いただけではなかったか。なぜなら、この指導陣は昭和二十四年大学昇格後もそのまま持ち越されたものの、同二十六、七年には古徑、靱彦、土牛、安井、梅原、碓その他が辞任してしまい、彼らの後継者たちと新たな有力作家たちから成る指導体制が作り直されなければならなかったからである。

次号予告
東京音楽学校生の陸軍音楽隊入隊
繰り上げ卒業、法文系学生の徴兵猶予解除、学徒出陣と戦況悪化が学舎にも押し寄せた昭和十九年十月、陸軍戸山学校は最後の音楽隊生徒となる百二十名を受け入れた。そのうち十四名が東京音楽学校の在校生であった。本来二年間であった音楽隊の修業年限も、最後は八ヶ月に短縮され、音楽生たちは二十年五月に卒業した。主席は作曲部の芥川也寸志であった。

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで荣誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

受賞学生インタビュー
第3回

第4回藝大アートプラザ大賞受賞

山本真衣

◆大学院美術研究科修士課程（工芸専攻 [ガラス造形]）2年

中学生時代からビーズを使ったアクセサリーに凝っていたので、高校卒業後は工芸科に進み、彫金かガラス工芸を本格的に学びたいと思っていました。さらに英語を話せるようになりたいという思いもあって両方が学べるイギリスの大学に留学したんです。

私が留学したウルバーハンプトン大学は、バーミンガム近郊のウルバーハンプトンにある総合大学で、私はそこの芸術学科に入ってガラス造形を3年間学びました。

イギリスと日本の美大とでは教育方針が違って、イギリスでは技術よりもアイデアや表現が重視されます。ですから、日本の美大で学んだ子とはひと味違った色彩感覚と発想力が身についたと思っています。ただし、作品の細部まできちんと処理するとか、高い精度はあま

り求められなかったため、藝大に入るまでの私は、コップを整った形でつくれないほどでした。いろいろなアイデアが湧いてきても、形がきちりと決まらない感じをもともと持っていて、そのきちりとした感覚を得たくて、藝大に進みました。

今回、藝大アートプラザ大賞を受賞した作品は「シャボン玉」というタイトルです。藝大アートプラザ大賞展は、2006年から在学生を対象に始まった学内アートコンペで、入選作品を展示、販売するものです。毎回、テーマが決められていて第4回のテーマは「地球」でした。

「地球」と聞いて私がまっさきに思い浮かべたのは、丸い形態であることとエコロジーでした。まずキャンドルホルダーで地球を表現したいと決めているいる考えていたところ、ある日たまたま友

だちと行った代々木公園で、シャボン玉で遊ぶ人たちに出会いました。私たちもシャボン玉を買って同じように遊んでいたら、夕暮れ時、フワフワと浮かんだシャボン玉の球面に、落ちていく夕日と公園の木立のシルエットが映り込む光景を目にしたんです。その美しい映像にインスピレーションを得て、シャボン玉の形をしたキャンドルホルダーを創り、大賞をいただくことができました。

私の場合、作品を創るときに、日常の中からイメージを得ることがほとんどなんです。たとえば大好きな料理をしていて、カボチャの皮のカット面がきれいだなと感じて、作品に活かすこともあります。

ガラス造形を続けていくには、大きな機材や広い場所が必要で大変な部分もあるのですが、自分らしい作品をこれからも創っていきたいと思っています。



第4回藝大アートプラザ大賞作品「シャボン玉 -little World-」(100×100×170) 素材、技法：ガラス、吹き・カット

やまもと・まい
東京生まれ。ウルバーハンプトン大学芸術学科卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻(ガラス造形)に入学。



おいけ・あみ

1988年東京生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校卒業後、東京藝術大学に進学。澤和樹、ジェラルム・ブーレ、オレグ・クリサの各氏に師事。ジャパンアカデミーフィルハーモニック団長。
<http://www.omiii.com/>



「藝祭'09」でジェラルム・ブーレ客員・招聘教授とサラサートの《ツィゴイネルワイゼン》を演奏

第78回日本音楽コンクール第1位・岩谷賞（聴衆賞）受賞

尾池亜美

◆音楽学部器楽科（ヴァイオリン）3年

もともと母がピアノを、叔母がヴァイオリンを弾いていて、二つの選択肢の中から幼な心にヴァイオリンを選んだんです。その後、父の転勤で2年間、スイスのクランという町に住んだのですが、幸運にも同じ町に、ハビブ・カヤレイというヴァイオリンの先生が住んでいらして、すばらしいレッスンを受けることができました。

公立の中学を出たあと、高校は藝大の附属音楽高等学校に進みました。藝高は同級生同士がまるで家族のように仲良しでした。みんなが音楽をするので、大変さがわかりあえる反面、音楽をすることが日常であり、あたり前だと思ってしまうこともありました。でも今は、音楽を演奏することは特別なことだ、ということをお忘れしないで弾き続けたいなと思っています。

クラシック以外の音楽も好きで、藝高時代の邦楽の友達からCDを貸しても

らって以来、椎名林檎の大ファンです。インターネットでメンバーを募って、椎名林檎のコピーバンドを結成し、ヴォーカルを担当していたこともあります。ロックやポップスが好きになってから、クラシックの演奏をするときも、ステージ上での表現や音の幅が広がり、生き方もアクティブになってきました。高校の卒業演奏会では、制服なのに髪をツツツに立てて、ロッカーのような気分でバルトークの協奏曲2番を弾いたんですよ（笑）

今回のコンクールでも、そのバルトークを弾いたのですが、高校の頃とは全然違った心持ちでした。自分らしさを出し、技術点より芸術点で勝負しようと思い、楽しんで聴いてもらえることを優先して演奏したんです。その結果として1位を受賞し、聴衆賞までいただくことができました。正直な自分を皆さんに受け入れてもらえたのですから、本当に感激して

います。

本選で弾いたバルトークの協奏曲2番は、私の最も好きな曲の一つです。ヴァイオリンの華やかな技巧や音色の美しさを聴かせるほかの作曲家の協奏曲と違い、ハンガリーの民謡を活かしたメロディーと打楽器的な奏法が特色で、その表現が自分にとってとてもしっくりくるんです。

大学生活も楽しんでいて、この前の藝祭では、打楽器の友達と組んで、「チンドン屋」のイメージで、浴衣姿でライブをしました。その中で、藝大の客員教授だったフランスのヴァイオリニスト、ジェラルム・ブーレ先生に浴衣を着てもらい、ツィゴイネルワイゼンをマリンバとヴァイオリンの合奏で演奏したことが最高の思い出ですね。そして何より、藝高、藝大の時期に得られた友達は一生の宝物です。

ふなびぎ・しんじゅ

1982年 東京都生まれ。東京大学在学時に自主制作した監督作『山間無宿』(00)が調布映画祭でグランプリを受賞。大学卒業後、東京藝術大学大学院映像研究科に入学(監督領域2期生)し、黒沢清監督、北野武監督らに師事。2008年修了。劇場公開短編作品に『夢十夜・海賊版「第五夜」』(07)、『錨をなげろ』(08)などがあり、オムニバス映画『夕映え少女』(2008年公開)では表題作「夕映え少女」の監督を務め、2009年公開の『携帯彼氏』が商業映画デビュー作となった。最新作短編『テクニカラー』(出演:洞口依子ほか)は、2010年3月に渋谷ユーロスペースで公開される。



監督作品『携帯彼氏』で注目を集める

船曳真珠

◆大学院映像研究科修士課程(映画専攻)修了

もともと映画が大好きで、子どものころにフェデリコ・フェリーニの『道』や黒澤明監督の『七人の侍』に感激したことを覚えています。そして、中学時代には映画に浸っていたと思うようになっていました。

映画を撮り始めたのは、東京大学在学中に入っていた「映画研究会」から。このサークルは一学年10人弱という小さなもので、駒場校舎に通う2回生まででした。仲間たちと映画づくりを楽しんだのですが、もっと外からの目も欲しいと思い大学と並行して「映画美術学校」に通うことにしたのです。

東大を卒業したあとも監督の勉強を続けたくて、実践的に学べる藝大の大

学院映像研究科に進むことにしました。映像研究科は、機材やスタジオも充実していましたし、何よりも実際に作品を撮ることができる、夢のような環境でした。

在学中に新港校舎で、北野武先生と北野組のスタッフの方々が実際に撮影するという、信じられないような授業がありました。私もオムニバスの中の一編を撮ることになる「夕映え少女」の脚本を使い、院生は助監督や録音助手を務める機会を与えられたのです。北野先生にはオーラだけでも圧倒されましたが、観察力と記憶力がとくにすごいです。そんなところに気づくのかという細部まで見ていますし、最小単位の

ものを記憶して頭の中で再構成していることに驚きました。また、先生の発言から、数学的に映画を考えられるところも新たな発見でした。

昨年ロードショー公開された『携帯彼氏』は、私の商業映画デビュー作になります。携帯電話の恋愛シミュレーションゲームと女子高校生が戦うという「サスペンス・ラブストーリー」で、携帯に束縛され生活が浸蝕されている時代状況に共感を覚えて、作品づくりに取り組んだものです。

監督としても一映画ファンとしても、日本の男優では森雅之さんや市川雷蔵さんのような、神秘的で影を感じさせる俳優に魅力を感じます。また、最近亡くなられた森繁久弥さんも、体の中に音楽が流れているような色気のある所作がすばらしいですね。

私自身は、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』のようなハリウッドの娯楽大作も楽しむタイプで、エンターテインメントとして映画を楽しんでもらいたいという意識があります。娯楽作品と芸術作品の中間をめざした、観客の方にとってこれまで見たことがないという発見と、純粋な楽しみの両方が兼ね備わった映画を撮りたいと思っています。



監督・脚本・編集作品『テクニカラー』

キャスト：洞口依子、小野ゆり子、岡部尚、吉岡睦雄、マモ山田ほか

教員は語る

美術学部建築科（環境設計） 准教授



ヨコミズマコト

野平一郎

音楽学部作曲科 准教授



——藝大への期待・抱負・提言——

コンサートホールの空間、
美術館の空間

司会 ヨコミゾ先生はクラシック音楽をお聴きになる機会がありますか。

ヨコミゾ Hiromiにはいつも何か入れています。大編成の音楽よりは、バッハの無伴奏ヴァイオリンやチェロ組曲のようなシンプルなものが好きで、演奏会に足を運ぶことも年に何回かあります。

野平 日本の最近のコンサートホールは、藝大の奏楽堂にしても音響的には相当響くようになってきているんですよ。だから聴く側もそういうのに馴れてしまっている。けれども海外のホールはここまで響かないですし、日本でも少し前まではそうでした。たとえば上野の東京文化会館は一九六〇年代に建てられたホールですが、過度には響きません。ですから音楽のディテールがよく聴こえるし、演奏の善し悪しも判断しやすいんです。

ヨコミゾ 響いてくるというのは、残響時間の問題なんですか。

野平 主に残響時間ですね。残響時間が長いとたとえばソロ演奏の場合とはうまく、アンサンブルにはバランスの問題が出てきて、あまりやりやすいとは言えないんです。だいたいホールというのは、基本的に上（二階より二階）の方が聴きやすいんですよ。演奏家が弾きやすく、聴衆も聴きやすく、しかも見た目がすばらしいというホールが理想ですよ。

僕は美術も好きなんです。パリのボンピドー・センター附属の音楽センターに在籍してることがあって、展示室もよく見に行きました。十九世紀末から二十世紀頭

にかけて、芸術表現も時代環境もめまぐるしく変化した時期に描かれた絵画にとくに惹かれます。

ヨコミゾ 僕の作品に二〇〇五（平成十七）年に完成した「富弘美術館」というのがあります。群馬県みどり市東町（旧・勢多郡東村）にある、地元出身の星野富弘さんという画家の作品を展示する公立美術館です。

この美術館で特徴的なのは、展示室がすべて円形なんです。なぜそのような設計にしたかと言うと、まず星野さんの作品は水彩画が中心でサイズも小さいんです。それに四角い展示室にすると、学芸員は四隅の使い方にとても困る。建築用語では「ハイエラルヒー」と言うのですが、展示室に入って真正面が一番いい作品になってしまふんです。そういう空間の序列は、一人の作品を展示する美術館には必要ないわけです。円形の展示室なら、ひとつひとつの作品をシーケンシャルに順番に並べていけますし、学芸員の意図通りに展示を組み立てやすいということで、展示室をすべて円形にしたんです。

野平 円い展示室を収容する全体はどういう形なんですか。

ヨコミゾ ピザボックスみたいな平べったい正方形です。その中に大小の円筒形がいっぱい詰まっている感じです。そうすると円筒と円筒の間に三角の隙間が空いてしましますよ。その隙間は庭になっていて、一部は一般の人も出られるようになっていきます。こんなに特徴的な設計は、個人専用の美術館だから実現したアイデアなんです。

野平 それはぜひ見てみたいですね。パリ



「富弘美術館」(群馬県みどり市東町) aat+ヨコミゾマコト 建築設計事務所設計 2005年



にも小さな美術館がいっぱいありますが、僕が留学していたころ、東洋美術のコレクションで知られるギユメ美術館ではコンサートをやっていましたし、パレ・ド・トーキョー(パリ市立美術館)でも室内楽の音楽会をやっていましたね。やはり雰囲気がとてもいいんです。美術館には演奏会をしたくなるようなスペースがいっぱいあって、小編成のものは昔から各地で演奏されていたんじゃないでしょうか。

ヨコミゾ 王侯貴族の住居がギャラリーであり、あるいはサロンミュージックの発祥だとすれば、美術館もホールももとは同じ空間だったのかもしれないですけれど、コンサートホールでは残響時間、美術館では照度や湿度を数値化して、それが空間の雰囲気などよりも優先されるような、機能偏重主義的な状況になってしまいましたんじやないですか。

野平 コンサートホールも、聴衆が一方的に舞台を見て、演奏家も一方的に演奏するという形では今後限界がくると思います。ですから美術館での演奏会に象徴されるように、お客さんと演奏家の関係がもっと自由になれるスペースがこれからできたらいいですし、するとその場所で奏でられる曲を書こうとして作曲家の意識も変わってくるんじゃないでしょうか。

作品はどのように生み出されるか

ヨコミゾ 僕は作曲家の脳の中はどうなっているんだろうととても不思議に思っていたんです。時間を支配できると

いう音楽作品の作曲が、複数のパートを同時に頭の中に思い描きながら、どういう手順で行われているのか一度伺ってみたいと思っています。

野平 僕の場合は、曲の最初ができないと進められないんです。つまり、途中から作品を書くということはできない。だから最初の部分だけで一曲につき六つも七つもあります。これでいこうと曲作りを始めてみても、途中でまた戻ったりして、そうしないと全体の時間的なものが見えてこないんですね。

ヨコミゾ 部分をつくって、それをコンバインするやり方とは全く違うんですね。**野平** ポンピドー・センターを設計したんですが、彼の建築のようにプレハブ的なものが連なっていくみたいな構造を、音楽に応用すればとてもおもしろいものができるように思えました。でも僕にはできないんですよ。あんなフレキシブルな構成や構造が最初から見ればいいのです。

ヨコミゾ 作曲するときにはピアノで音を出されたりしながら、一方でそれ以外の楽器の音も全部頭に浮かんできているんですよ。そうしていろいろなパートを同時に書いていかれるんですか。それともある程度主旋律が出てきてから、その周辺を肉付けしていくような感じなのではないでしょうか。

野平 僕は細かいところがわからないと先に進まないタイプなんです。しかも、ピアノが弾けるのに、ピアノではあまり作曲せず頭の中で考えます。もやもやしたもののがはつきりしないと先に行かない

ヨコミゾマコト
美術学部建築科 准教授
一九六二年神奈川県生まれ。
一九八四年東京藝術大学美術学部建築科卒業。
一九八六年同大学院美術研究科修士課程建築専攻修了。
一九八八～二〇〇〇年伊東雄雄建築設計事務所勤務。
二〇〇一年 aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所設立。
東京藝術大学、東京大学、東京工業大学、東京理科大学、法政大学、首都大学東京、昭和女子大学非常勤講師、東海大学情報デザイン工学部特任准教授を経て
二〇〇九年より現職。
aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所主宰。

ので、最も非効率的なのかもしれませんが、ね。

ヨコミゾ 創作活動は元来そういうものですからね。僕は事務所のスタッフにわれわれの書く図面は一種のスコアだと言っています。施工してくれる人たちにわれわれが自ら現場でコンダクトしなくては思い描いた通りの最終的なものにならないわけです。だから一方通行的な図面ではなくて、コミュニケーションのための図面を書くように指導しています。

ところで作曲家の方も、いきなり五線譜に向かわれるのではなくて、スケッチに値するようなものがあるんですよ。

野平 それも曲によってさまざまですが、最初にまずイメージがあります。それは言葉によるイメージかもしれないし、何か別の作品から来たイメージかもしれないし、あるいは視覚的なさまざまなイメージかもしれないし、そういう未だ形になってくる。そういうことから具体的な音になっていくという、前段階というのがありますね。

野



野平一郎演奏風景 ミリオン協会提供 ©相田憲克

ヨコミゾ そこはとてもよく似ていますね。さまざまな外的な制約条件をまず頭に入れて、それでもそれに縛られない自由さをどう保つか、可能性を探る時期が建築にもあります。

図面にもいろいろな段階がありますが、実際にきちんとした図面を書き始めるときはほぼ決まっているときです。最初は今生がおっしゃったとおり、形にならないものが浮かんで、現実条件に当てはめてみて、どんな問題が発生するか検証し、それじゃあこうしようか、ああしようかという作業の連続です。最初に思い浮かべたものが純粹にそのまま形にできるという世界とは違いますね。そういった意味では極めて社会的な産物と言えるかもしれません。

学生たちを豊かにするということ

野平 僕が藝大の学生だったころは具体的に技術を習うということはありませんでした。授業を通してでなくても、雑談の中にさまざま手掛かりが散りばめられていて、自分自身で研鑽を積むというのが作曲家のイメージだったんです。でも教員として藝大に戻ってきてからは、もう少し細かいことを教えなければいけないのかなという気になっているんです。

技術的な問題は、あらゆる芸術分野の中にあるでしょう。でもむしろ学生がこれから芸術家として考えていかなければならないことに対して刺激を与え、背負っているものを豊かにしていった方がいいと思います。芸術というのはいくら技術的に進んだところで、その人が薄っぺらかったら出てくるものも薄っぺらだと僕は

思っています。たとえばピアノの世界ですと、五十年前と今とはテクニックは比較にならないほど進んだはずですが、技術の進歩が音楽を本当におもしろくするのだからか、ということはずっと問われてきました。ですから今は、プロの演奏家や作曲家を目指す学生が何を考えて音楽をやっているのかということが重要で、そこを豊かにしてあげられるようにしたいんです。それを言葉で言うのは簡単ですが、実行するのはなかなか難しいことですよ。

ヨコミゾ 全く同感です。ゼミの時間にエスキースをやっている、カウンセリングのようですよ。壁にぶつかっている学生を指導するのはまるで人生相談です。僕が学生の頃も、あまり学校にこない仲間もいましたが、そういう学生も一本筋が通っていて、課題を提出する日にはどんな点があったのかと、自分が何を持ってきた。ところが今は、自分が何をしたいのか、何に悩んでいるのかもわからないという感じなんです。

豊かにお話がありました。建築に対しては夢を持っていくようにしてあげなければいけないと思います。音楽のほうも同様に深刻な問題かもしれません。実際に社会に出てどう生きていくかということ、頭のいい学生であればあるほど考えこんでしまうみたいですね。一人の建築家として、世の中に対して何をやっていけるのかという可能性を自ら狭めてしまおうというか、限界を早くも悟ってしまおう。

一方で藝大生はある意味優秀ですから、大手の設計事務所や建設会社といった組織が受け入れてくれる。そういうところのほうが活躍の場が保障されているかのよう

に、あるいは楽に生きていけるかのように見えてしまうという現実もあります。でも僕としては、プロフェッショナルアーティストとして自分の夢を信じ、どこであろうと勇猛に突き進んで行ってくれるような学生を育てていきたいですね。そのためには自分も夢を感じてもらえる仕事をしなくちゃいけないんです。

野平 自分たちが学生のときに感じていた音楽へのあこがれや、こういうものをやりたいと抱いていた期待みたいなものが、今の学生たちにはあまりないのかもしれないですね。世の中全体に夢がなくなっているような状況なので、その反映がもしもありませんが……。

現在の音楽の世界が演奏、すなわち過去の作品をいかに解釈するか、ということに特化している時代だからこそ自分は「作曲家よ、頑張れ」と言いたいわけなんです。作曲に対する夢を損なわず、時代を突破して育っていった欲しいというのが、学生への期待であり、僕たちの務めだと思っています。

野平一郎(のだいら・いちろう)

音楽学部作曲科—准教授(四月より教授)

一九五三年東京生まれ。

一九七六年東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。

一九七八年同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻修了。

一九七八年フランス政府給費留学生として

パリ国立高等音楽院で作曲とピアノ伴奏法を学ぶ。

一九九〇年〜二〇〇二年東京藝術大学助教授。

二〇〇五年静岡音楽館△O芸術監督。

二〇〇九年より現職。

一九九五年尾高賞。二〇〇四年サントリー音楽賞。

二〇〇五年芸術選奨文部科学大臣賞。

主要作品にオペラ「マドルガーダ」、

チェロと管弦楽のための「響きの連鎖」など。

◆故平山郁夫先生「お別れの会」 二六二〇名が別れを惜しむ



昨年十二月二日に七十九歳で死去された日本画家で本学の前身である平山郁夫先生の「お別れの会」が二月二日、東京都港区のホテルで執り行われ、三笠宮崇仁親王殿下をはじめ、美術界、政財官界人や各国大使ら約二六二〇名が参列した。

純白の花で彩られた祭壇には、遺影とともに平山先生が描いたシルクロード作品の太陽と月の部分を印刷した一双の屏風が置かれ、天皇皇后両陛下、皇太子・同妃両殿下、三笠宮殿下からの供花や文化勲章などが飾られた。

会の委員長を務めた松尾敏男（財）日本美術院理事長の弔辞に続いて、宮田亮平学長は、「偉大な先達を失ったことは、東京藝術大学のみならず、世界の文化芸術界に

ざつても大きな損失ではあるが、先生の教えは、幾多の卒業生、教職員の上に確実に受け継がれ実践されてゆくものと確信しています。」と弔辞を述べた。

続いて、鳩山由紀夫内閣総理大臣や胡錦濤中国国家主席、ニール・マクレーガー大英博物館館長の弔電が読み上げられ、世界の文化遺産保護に努めた平山先生のお人柄が偲ばれた。

その後、参列者献花に移り、故人との別れを惜しむ長列が続いた。

交流

◆大学間国際交流協定締結

六月二十三日、韓国傳統文化學校（韓国）と本学大学院美術研究科は、美術に関する交流を深めるとともに、教育及び研究に関する協力をを行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

七月九日、トリノ工科大学（イタリア）と本学は、芸術に関する交流を深めるとともに、教育及び研究に関する協力をを行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。これらの調印により、本学における交流協定締結校は、十六か国（地域）、四十四大学等となった。

◆「日中芸術教育シンポジウム」を開催

十二月二十二日、北京の清華大学美術学院講堂において、「日中芸術教育シンポジウム」を開催した。

これは二〇〇七年、本学の創立一一〇周年に際し、世界に向けて発信した「藝術語言」を契機としたもので、日本と中国の主要な八芸術大学の学長、院長が一堂に集い、芸術教育、両国の大学間交流や文化交流の発展を推進することについて話し合われた。

シンポジウムは、第一部の学長会議、第二部の教員会議、第三部の本学元留学生による演奏会からなり、会場を埋め尽くす熱心な学生に囲まれながら、各々の現状と発展について、公開で議論が行われた。

受章・受賞

◆萩岡松韻教授が「第二十九回伝統文化ポーラ賞優秀賞」を受賞

八月十日、音楽学部邦楽科の萩岡松韻教授が、山田流箏曲の演奏・作曲、さらには多くの子弟への指導育成など伝統文化への貢献が評価され、第二十九回伝統文化ポーラ賞優秀賞を受賞した。

◆村岡貢美男助教が「再興第九十四回院展奨励賞」を受賞

九月一日、美術学部絵画科日本画専攻の村岡貢美男助教の作品「煉獄の門」が、再興第九十四回院展において奨励賞を受賞した。

◆小椋範彦准教授が「第五十六回日本伝統工芸展東京都知事賞」を受賞

九月二十五日、美術学部工芸科漆芸専攻の小椋範彦准教授の作品「割貝時絵桜花文飾箱」が、第五十六回日本伝統工芸展において東京都知事賞を受賞した。

◆宮田亮平学長が第四十一回「日展」内閣総理大臣賞を受賞

十月三十日、宮田亮平学長の作品「シュプリンゲン」が、第四十一回日展（平成二十一年度）工芸美術部門において内閣総理大臣賞を受賞した。

◆伊藤有希教授が「The 6th China International Animation and Digital Arts Festival 2009 トキョウ カネテリー・特別栄誉賞」を受賞

十月二十八日、大学院映像研究科アニメーション専攻の伊藤有希教授が、「The 6th China International Animation and Digital Arts Festival 2009」において「テレビカネテリー・特別栄誉賞」を受賞した。

運営

◆平成二十一年度「芸術祭」を開催

九月四日から六日まで、「ArtEco」をテーマに「芸術祭」が開催された。

初日は美術学部・音楽学部の一年生が一夏かけて作り上げた八基の神輿が、サンパ隊を先頭に上野公園を練り歩いた。また学内では、三日間にわたって展示・演奏会・模擬店などさまざまなイベントが催され盛大な賑わいを見せた。

◆上野タウンアートミュージアム（TAM）今年で三回目となる上野タウンアートミュージアム（TAM）が盛況のうちに閉幕した。本プロジェクトは、本学と台東区が一体となり、区内各所の会場に作品を展示することで、街のミュージアム化を図るもの。

企画された八つのプロジェクトは、地域の中にある社会性、環境、歴史、市民とのコミュニケーションの関係性の中から新しい芸術の一つのあり方を示すと共に、町の中に芸術作品を仕掛け、ミュージアム化するという本学大学院教育の大きな試みでもある。

◆「藝大アーツイン東京丸の内」が盛況のうち閉幕

十月二十五日から七日間にわたり、丸ビルで開催されていた「藝大アーツイン東京丸の内」が一人を超える来場者を迎え、大盛況のうちに閉幕した。

本学と三菱地所株式会社が共同主催する「藝大アーツイン東京丸の内」は、本学の若い才能により、丸の内からさまざまな文化、芸術を発信していくイベントとなっている。



出版会活動

◆DVD「大学院映像研究科第三期生修了作品集二〇〇九」を十月十五日より発売



二〇〇九年三月に修了した映画専攻第三期生。短篇、長篇と数々の制作実習を重ねてきた学生たちが、その集大成として取り組んだ修了制作全五作品を、今年もDVDとして発売。

収録されるのは、第二十八回バンクーバー国際映画祭のドラゴン&タイガー部門に正式出品したほか、ロッテルダム国際映画祭から招待を受けた「イエローキッド」（真利子哲也監督）をはじめ、今後の活躍が期待される監督たちの作品群である。

◆「六角紫水の古社寺調査日記」を十二月二十五日より発売

東京美術学校（本学の前身）第一回卒業生で近代漆芸の大家となった六角紫水が、若き日に岡倉天心のもとで古社寺保存会の宝物調査のため各地を旅行したときの日記。明治三十五年、六年に近畿、山陰、東北、関東地方の古社寺を巡歴したとき記したもので、宝物調査の様子を如実に窺うことができる稀有な記録資料である。

本書はそれらの日記の全部と紫水が書き残した宝物調査の回想記、解説、紫水年譜からなる。美術関係者のみならず一般にも広く読んでいただきたい本である。



東京美術大学出版会の出版物等は、本学藝大アートプラザ、アマゾン（ネット販売）および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ（〇五〇一五五二二二〇）まで。

三年目となる今年は、オープニングセ

現在年2回(3月と9月)発行されている藝大通信も20号を迎え、より“旬の藝大”を発信しようとしてリニューアルを行いました。創刊当時(平成13年)と比べ、社会に開かれた大学を目指す中で本学もずいぶん変わり、その空気を感じてもらえる誌面づくりを目指した次第です。例えばこれまであまり外部発信されていない、学生の日々の研究活動を紹介していくことも重要な役割。また社会との結びつきを深める中、大学内の事だけでなく上野の山の境界の楽しい、知られざる情報も同時にお届けできればと思います。

ただ、時代は変わろうと藝大は何と言っても「人」が根幹、それは変わりません。表紙のデザインは様々な作品(図)の前に、それを生み育てた人(地)にスポットを当てていこうというのが狙いです。生まれ変わった藝大通信をこれからもどうぞ宜しくお願いいたします。

藝大通信編集長
長濱 雅彦

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト (<http://www.geidai.ac.jp/>) をご覧ください。

- 展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 050-5777-8600
- 演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学音楽学部演奏企画室
Tel. 050-5525-2300
- 演奏会チケットの取り扱い
藝大アートプラザ
Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットびあ
Tel. 0570-02-0990
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5815-5452
- 藝大アートプラザのご案内
Tel. 050-5525-2102
Fax 050-5525-2486



◆学長と語る①
奏楽堂トーク&コンサート
十一月十四日、第六回「学長と語る」奏楽堂トーク&コンサートが、ゲストに水中写真家として著名な中村征夫氏を招いて開催された。

◆藝大 理研 連携協力記念シンポジウム
「未来を拓く〜科学と芸術の交差点〜」を
開催
本学と理化学研究所による連携協力記念シンポジウム「未来を拓く〜科学と芸術の交差点〜」が十一月十五日、奏楽堂にて開催された。

◆第四回 藝大アートプラザ大賞
入賞作品展
十一月二十五日から十二月二十日まで、第四回「藝大アートプラザ大賞作品展」(作品テーマは「地球」)が藝大アートプラザにて開催された。これは、学生の制作活動の成果を広く社会に発信するため平成十八年度から実施している学内アートコンペ



◆映画専攻第三期生修了制作
『イエローキッド』快進撃
映画専攻第三期生が手掛けた修了制作の一本『イエローキッド』(真利子哲也監督)が、一月三十日の東京公開を皮切りに全国ロードショーをスタート。これは、全国独立系映画館主のネットワークである「シネマ・シンジケート」が、今年、最も将来を期待される新人監督作品として、同作を選出したことによるもので、映画専攻の修了制作作品が全国の劇場で一般公開されるのは、これが初となる。国内のみならず、昨年のバンクーバー国際映画祭、一月のロッテルダム国際映画祭、さらに三月以降も各国の映画祭への出品が続くなど、海外からも熱い視線が注がれている。

◆今年度下半期に開催された
主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
異界の風景
—東京藝大油画科の現在と美術資料—
会期 十月二日〜十一月二十三日
入場者数 二万三〇三名
退任記念展
絹谷幸二 生命の軌跡
ars vita esta・vita ars esta
会期 一月五日〜十九日
入場者数 八二二名

◆今年度下半期に開催された
主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
異界の風景
—東京藝大油画科の現在と美術資料—
会期 十月二日〜十一月二十三日
入場者数 二万三〇三名
退任記念展
絹谷幸二 生命の軌跡
ars vita esta・vita ars esta
会期 一月五日〜十九日
入場者数 八二二名

◆今年度下半期に開催された
主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
異界の風景
—東京藝大油画科の現在と美術資料—
会期 十月二日〜十一月二十三日
入場者数 二万三〇三名
退任記念展
絹谷幸二 生命の軌跡
ars vita esta・vita ars esta
会期 一月五日〜十九日
入場者数 八二二名

レモニーを皮切りに、大吊り幕によるマルキューブ空間演出、宮田学長によるトークショー、藝大神輿の展示、三菱地所賞二〇〇九受賞者アート展及びリサイタルに加えて、「国際交流」と「オペラ」をテーマとした留学生による民族楽器演奏会、オペラ研究部によるオペラハイライト、さらにはピアノ専攻学生のスタインウェイピアノによる演奏や特別講演会など、連日、多彩なプログラム(展示や演奏会等)を展開し、丸ビルにご来場のお客様を魅了した。来年は十月二十六日から十月三十一日まで開催を予定している。

◆今年度下半期に開催された
主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
異界の風景
—東京藝大油画科の現在と美術資料—
会期 十月二日〜十一月二十三日
入場者数 二万三〇三名
退任記念展
絹谷幸二 生命の軌跡
ars vita esta・vita ars esta
会期 一月五日〜十九日
入場者数 八二二名

◆今年度下半期に開催された
主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
異界の風景
—東京藝大油画科の現在と美術資料—
会期 十月二日〜十一月二十三日
入場者数 二万三〇三名
退任記念展
絹谷幸二 生命の軌跡
ars vita esta・vita ars esta
会期 一月五日〜十九日
入場者数 八二二名

◆今年度下半期に開催された
主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
異界の風景
—東京藝大油画科の現在と美術資料—
会期 十月二日〜十一月二十三日
入場者数 二万三〇三名
退任記念展
絹谷幸二 生命の軌跡
ars vita esta・vita ars esta
会期 一月五日〜十九日
入場者数 八二二名

◆今年度下半期に開催された
主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》
異界の風景
—東京藝大油画科の現在と美術資料—
会期 十月二日〜十一月二十三日
入場者数 二万三〇三名
退任記念展
絹谷幸二 生命の軌跡
ars vita esta・vita ars esta
会期 一月五日〜十九日
入場者数 八二二名

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No. 20 MARCH 2010

編集発行 東京藝術大学 藝大通信編集部